

# 病弱児の心理学的研究に関する一考察

## 日本における近年の研究動向

小島道生

Psychology of Children with Health Impaired Children  
in Japan : A Review

Kojima Michio

本研究の目的は、わが国における病弱児を対象とした近年の心理学的な研究動向を分析し、現在の到達点と今後の研究課題を明らかにすることである。分析の結果、病弱児の心理・行動に関する研究は、対処行動を中心とした研究から多様な領域に広がりを見せていることが明らかとなった。筋ジストロフィー児への支援に関する研究では、QOLの向上との関係から自己効力感あるいはコンピューターを活用した研究などが盛んに取り組まれていた。病弱養護学校に在籍する児童・生徒に関する研究では、心身症の児童・生徒が増加していること、また教育実践についてアセスメントの作成が行われたり、病院内学級の教育実践のありようを分析した研究など先駆的な研究が展開されていた。今後の課題として、病弱養護学校に在籍する児童・生徒の実態が大きく変化しており、実態に即した支援方法の開発研究などが求められると考えられた。また、病院内学級などで取り組まれた質的研究はこれまで示されていなかった教育の機能を明らかにできるなど支援の質を考えていく上で、新たな知見をもたらす可能性があり、今後の研究の蓄積が期待された。

### I. はじめに

わが国における病弱児を対象とした心理学的な研究は、特別支援教育のなかで他の領域と比較して多いとは言いがたい。病院内学級に関しては、入院児のプライバシーや心理的安定を守る為に現場の警戒感が強いこと等が原因として考えられるが、これらは研究の必要性を否定するものではない(谷口, 2004b)。近年では、院内学級の子どもの心理的問題の重要性が指摘(横田, 1997)され、入院児のQOLへの関心高揚に伴い、研究へのニーズは高まっており(谷口, 2004b)、徐々に研究成果も報告されつつある。そこで、本研究では病弱児を対象とした日本における近年の心理学的研究に関する研究動向を分析し、現在の到達点と今後の研究課題を明らかにする。

なお、本研究では近年の研究動向ということで、主に過去10年の心理学的な研究成果を中心に論を展開する。ちなみに、武田(2006)によれば、病弱という言葉は医学的な用語ではなく、病気にかかっているため体力が弱っている状態を示す常識的な意味で用いられ、一般に病弱とは慢性疾患等のため長期にわたり医療や生活規制を必要とする状態をいう。

病状が慢性に経過する疾患に限り、急性のものは含めない。本稿では、現在わが国において病弱教育の対象となっている重度・重複障害児については含まないことにした。

## II. 近年の研究動向

### 1. 病弱児の心理・行動に関する研究動向

病弱児の心理を概説した書籍などにおいては、従来より対処行動が頻繁に取り上げられる。対処行動とは、苦痛体験をはじめとするさまざまな体験が、大きなストレスを招くが、そのストレスを軽減させようとして何らかの行動を起こすことである（笠原，2003）。1980年代より、対処行動に関する研究は取り組まれてきた（例えば、岡，1987；1988；小畑・三澤，1981）。近年では、平賀（2004）が慢性疾患患児を対象に、ストレスとコーピング方略との組み合わせとの関連が、ストレス反応に及ぼす影響について検討した。その結果、ストレスの種類とコーピング方略の組み合わせによってストレス反応に及ぼす影響が異なることを示唆している。慢性疾患の子どもの自己効力感について検討した研究（武田・原，1997）から、対処行動を考える際には、自己効力感を考慮しながら検討していく必要があると言える。

自己効力感とは、自分の行動の可能性に対する認知とされBandura（1977）によって提唱された概念である。いわば、自己効力感とは明示されている種々の遂行を達成する行動の道筋を組み立て、かつ実行できる可能性があるかどうかの個人の判断と換言される（Bandura，1986）。自己効力感とは、臨床心理学領域で行動変容にかかわる重要な概念として扱われているが、病弱児を対象とした事例研究でも取り上げられている。渡部・成田（2002）は、病弱養護学校高等部に在籍しベッドサイド学習を続けている進行性筋ジストロフィー症児1名に対して、コンピューターやインターネットを活用した自己効力感の形成を図った。その結果、学習にコンピューターやインターネットを活用したことにより、対象者は学業的な動機づけを高め、ストレスに対する前向きな評価や対処を示した。そして、これらの行動変容の要因として、対象者の自己効力感の高まりが直接的あるいは間接的に作用していることが示唆されたことを報告している。

病弱児を対象とした研究は、こうした対処行動に関する研究以外にも、多様な領域について研究が広がりを見せている。小畑（1999）は、一連の研究で健康障害児の病気に関する概念の発達について検討している。小畑（2000）は、喘息児と健常児の身体内部の概念に関する機能について、検討した。その結果、健常児の方が身体内部の機能に関する知識に関しては高得点をとっていた。そして、過去の多くの研究では子どものパフォーマンスをもって「病気」や関連概念の研究を行ってきたが、この点について見直しが必要と主張している。また、中村（2002）は、先天性心疾患患者への病気に対する調査を実施した。その結果、アンケート調査からは周囲の人々とかかわっていく中から、自分自身と自分の病気をより意識することによって、病気という障害を受容し、より積極的に他者とかかわり、自己成長を遂げていくような“病気とともに生きる姿”が認められていた。また、インタビュー調査からは、子どものうちは病気について親任せであるため、思春期～青年期と移行する過程で、自分の病気体験が具体的な問題として感じられるようになること、そしてこの時に心理的援助が必要であると考察していた。中内（2001）も、病弱児の病気体験を理解するために、作文分析を手がかりとして検討した。

その結果、小学部低学年は治療等の苦痛や家庭から離れることへの不安を大きな脅威と受け止める傾向にあるものの、小学部高学年および中学部では、病気の受け止め方や病気に対する態度は多様化し、高等部では病気とともにあった今までの生活や自分自身を振り返った作品や、病気体験を肯定的に意味づけした作品が多くなることが明らかとなった。さらに、中内（2001）は子どもの語りについても分析しているが、病気の語りは、面接では作文で記述できなかった病気体験をじかに聴くことができる反面、対象者は情緒不安定になることなく自分の病気体験を言語化できる者に限られるという課題を述べている。

これら研究の他に、ストレスや不安などを扱った研究もある。伊藤・中橋（1999）は、院内学級に通う児童のストレスの実態と心理的ケアについて、調査研究により検討した。その結果、「外で遊べない」ことにストレスを感じている児童が多く、それに対し教師は極力外での活動を用意していることが明らかとなった。また、谷口（2004a）は、病弱養護学校の入院児を対象として、入院児の不安の構造と類型について検討した。その結果、入院児の不安が「将来への不安」「孤独感」「治療恐怖」「入院生活不適應感」「とり残される焦り」の5つの構造を有し、さらに入院児が3つの不安の類型に分かれることが明らかとなった。また、女子のほうがより強い「不安」と「孤独感」をもち、発達段階が高いほうが「将来への不安」「入院生活不適應感」をより多く頂いていることが明らかとなった。そして、入院が長くなるほど、社会との隔絶感も強まり、卒業後の職業選択が身近な問題となる高校段階のほうが「将来への不安」が高まると考察されている。この研究より、発達段階による変化が「将来への不安」と「入院生活不適應感」が高くなっており、生活年齢の上昇と入院生活経験の長さが病弱児のこれら領域について影響を与えていると言えよう。病弱児の心理には、過去、現在、未来という時間的展望がかかわっていると推察される。病弱児への支援を考える場合にも、特に青年期になるにしたがって、現在の状況を理解するためには、本人のこれまでの過去の経験と将来への捉えを視野に入れて時間軸の中で見つめていく必要がある。

一連の研究から、病弱児が自らの病気をどのように理解し、いまはどのような心理的な状態なのか発達的な観点ももちつつ、不安を低減し、希望を抱けるような支援を展開していくことが望まれる。先行研究では、量的な研究と語りによる質的な研究の両方からアプローチが行われていた。生活年齢の上昇とともに、病気の捉えは多様化する。したがって、より個人へのアプローチを実現し効果的な支援へとつなげるためには、質的研究の取り組みも重視されるべきである。心理学領域における質的研究はわが国においてもその取り組みは始まったばかりであり、今後の展開が期待されよう。

この他に、村上（1997）は、一連の研究で慢性疾患の病状変動と自己管理について検討している。また、田辺（2001）は慢性疾患児のセルフケアに関する研究動向について言及したなかで、日本の子どものセルフケア研究は緒についてところであると指摘している。石川・小畑・小野（2002）は、慢性疾患のセルフケア尺度の作成も試みているが、今後セルフケアに関する領域の発展も期待されよう。

## 2. 筋ジストロフィー児への支援に関する心理学的研究動向

筋ジストロフィーを伴う生徒の余暇活動に関する研究では、生徒自身が楽しんだり夢

中になったりしている活動のトップがパソコンを活用したインターネットやメール交換であることが報告（伊藤，2002）されている。そのため，筋ジストロフィーを対象とした事例的な研究などでは，パソコンを用いた研究が取り組まれてきた。しかしながら，院内学級におけるICT活用状況の現状と課題についてアンケート調査で検討した研究では，一部の先進的な学級を除き，大多数の院内学級のICT環境は不十分なままであったと報告されている（赫多・山本，2004）。また，指導する側の教員について，機器のトラブルに一人で取り組めない，著作権やセキュリティ管理等に対する改善が必要であることも明らかとなった。したがって，教育現場では教師のパソコンなどに対する知識や指導技術の向上が望まれる。

ソーシャルサポートについて，検討した研究もある。鳴海・武田・原（1999）は，筋ジストロフィーの高校生のソーシャルサポートについて，病弱養護学校に在籍する高校生に対して検討した。その結果，筋ジストロフィーの高校生は「母親」に対するサポート期待が一番高かった。これは一般の中学生，気管支喘息の中学生のサポート期待が「友達」が一番に高かった結果とは異なり，筋ジストロフィーの特徴的な結果であった。そして，2番目に高かったのが「学校の先生」，3番目に高かったのが「父親」という順になっていた。母親，父親を含めた家族に対するサポート期待が高いのが，筋ジストロフィーの高校生の特徴と考えられた。その後，鳴海・武田（2000）は筋ジストロフィーの高校生のソーシャルサポートについて，自由記述も分析した結果，実際のサポートが73.1%と最も多く，次に情緒的サポート（23.9%），情動的サポート（3.0%）となっていた。具体的な記述からは，「日常生活動作の介助に関すること」，「移動や車いすの介助に関すること」，「勉強を教えて欲しい」，「トイレの介助」，「配慮のある介助をして欲しい」といった内容が認められていた。日常生活動作や移動等に関することや病棟で起きたトラブルを解決して欲しいという実際のサポートの記述数が最も多いことが明らかとなった。ソーシャルサポートについて，筋ジストロフィーの高校生は特徴的な結果を示しており，教育・支援に携わる者はこうした求められるサポート内容に配慮しつつ支援を考えていく必要がある。

この他に，馬越・長尾（2000；2001）は，進行性筋ジストロフィー患者のQOLについて意識調査と支援に関する検討を行っている。意識調査では，年齢とともに今の自分の満足しているが，生活全般の評価が下がることなどが明らかとなった。その後，馬越・長尾（2001）は一人ひとりに応じたQOLの維持や向上の実践へと展開している。その他，進行性筋ジストロフィー児を対象としては，高橋・柳本（1999）は進行性筋ジストロフィー児の生きる意欲と指導など教育実践の取り組み，養護教諭を対象とした支援の実践（築山・星山，2004），母親の心理変容過程（米須・星山，2004）からも検討がなされている。進行性筋ジストロフィー児に関する心理学的研究は，本人の支援にかかわる領域を中心に取り組まれているが，母親などを対象としても行われている。

### 3. 病弱養護学校に在籍する児童生徒の実態に関する研究動向

近年，病弱養護学校では心身症などの児童生徒数が増えてきている。それを反映して，病弱養護学校の心身症などの児童生徒の実態調査が行われている。篁・武田・海津・西牧（2004）は，「心身症など行動障害」の病気分類で在籍している児童生徒のうち46%

は、強迫神経性、不安障害、対人恐怖等の神経症、摂食障害、さらにはうつ病や統合失調症などの重篤なものを含めた精神疾患のいずれかの診断を受けていたと報告している。心身症・神経症等を伴う不登校児の心理・行動特性についてTRF (Teacher's Report Form) を用いて検討した研究 (武田, 2004)では、臨床域、境界域にある者を合わせると、77%の児童生徒が問題を抱えていることも明らかとなった。また、診断名に不登校と記載あるいは診断以外の問題として不登校があげられている例を合わせると、不登校経験がある児童生徒は69%にのぼる (篁・武田・海津・西牧, 2004)。くわえて、病弱養護学校が、精神遅滞、自閉症、LD、ADHDなど病弱以外のいろいろな障害の児童生徒が増えてきていることも報告されている (中井・武田・山本・横田, 2005)。病弱養護学校では、病気の傾向が変化してきており、さまざまな障害のある児童・生徒が認められつつあると言えよう。

近年では、不登校生徒に対する心理教育的支援としてストレスマネジメント授業を実施した研究 (山口・高野, 2005)、授業参加を促進するために行動分析的アプローチにより介入をした研究 (及川・宮崎, 2005)、心身症の児童 (小学3年生女子) に対して教育相談を行った研究 (進藤・室田・上野, 2002) なども報告されている。このように事例的な検討も報告されつつあるが、具体的なアプローチの方法は今後の課題と言えよう。

他に、病弱養護学校の実態調査としては、通学児童生徒が30~40%いることも報告され、今後も入院児童生徒数が減少し、通学の児童生徒が増加すると予想されている (中井・武田・山本・横田, 2004)。そして、通学児童生徒の主治医が隣接する病院いない場合があること、さらにそのことからいろいろな問題が生じていることが示されている (中井・武田・山本・横田, 2004)。病弱養護学校に在籍する児童・生徒の実態は著しく変化をしており、教師に求められる専門性なども多様化していると考えられる。

#### 4. 病弱児への教育実践に関する心理学的研究動向

病弱児の教育実践に関する心理学的な研究も報告されている。高橋・藤田・山本 (1997) は、慢性疾患児のための教育アセスメントの作成を試みた。その結果、学習、生活、健康、性格の4領域から構成することは、妥当性・信頼性が確認された。また、疾病対処行動、学習態度、生活態度、性格が相互に影響し合う関係にあることが明らかとなり、慢性疾患児の教育においては学習面だけではなく、生活面、病気の理解、心のケアなど多面的な角度から捉えなければならないことが明らかとなった。谷口 (2004b) は、ひとつの病院内学級における教育実践のありようを検討し、教育実践が入院児童の生活世界の中でどのような機能を有するかを探求した。フィールドワークによる多角的データ収集を行い、質的研究法の手順に即った分析を行った。その結果、教師の実践が関係調整、参加援助、心理的ケア、環境設定、学習援助、疾患理解援助、しつけの7つのカテゴリーに分類された。また、病院内学級の教育実践が、孤立し、エネルギーを失っている児童の生活世界のシステム間をつなぐという援助機能を有していることを見いだしている。この他に、病弱児の心理的援助にかかわる授業について、物語教材を用いた教育実践に関する報告 (矢吹, 1998)、通常学級における病気療養児と教育との関係に関する研究 (猪狩・高橋, 2002) などがある。

フィールドワークにより質的な研究方法は、一般にアンケート調査などの研究方法に比べて、より現場に近い視点から考察することができよう。病院内学級などで取り組まれた質的研究はこれまで示されていなかった教育の機能を明らかにできるなど支援の質を高めていく上で、新たな知見をもたらす可能性があると考えられる。病弱児の支援ニーズは、一人ひとり異なるものである。教師が如何に異なるニーズのある児童・生徒にかかわり、質の高い実践を展開させていこうとしているのか、今後、心理学者もフィールドワークを基本とした取り組みが大切となろう。

### Ⅲ. 今後の課題

病弱児や筋ジストロフィー児に対する心理学的研究は、自己効力感に関する研究が比較的多く取り組まれてきた。筋ジストロフィー児への支援に関しては、現在の取り組みでは、自己効力感を重要な概念としつつ、パソコンを用いて生活環境を整備していくことなどが望まれる。ただし、児童・生徒の一人ひとり支援のニーズは異なるため、量的な研究で一般的な傾向を導くだけではなく、児童・生徒の語りに着目したり、教育現場でのフィールドワークといった質的な研究をも組み合わせて、総合的に検討していくことが求められるよう。

病弱養護学校は、特別支援教育学校への流れのなかで、対象児童・生徒の障害も多様化し、質的にも異なってきている。なかでも、中学部、高等部での心身症などの行動障害などの児童生徒数は高い割合を占め、加えて不登校経験のある児童生徒数も多く含まれていることから、今後は地域における不登校対策の問題とも密接に関係してくる（西牧・篁・武田・海津，2004）。在籍する児童・生徒の実態が変化していることから、心理学的な研究課題も実態に即したものと変化していく必要がある。したがって、今後は心身症や不登校などを経験した児童・生徒に対して、効果的な支援を如何に進めていくのかという事例的な研究の蓄積が求められるよう。くわえて、それら研究成果を現場に還元し、既に教育現場にかかわる教師自身もそれら児童・生徒に対応できるような専門性を向上させるようなシステムを構築していくことが求められるよう。

### 文 献

- ・ Bandura, A. (1977) Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavior change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- ・ Bandura, A. (1986) *Social foundations of thought and action : A social cognitive theory*. Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall.
- ・ 平賀健太郎 (2004) 慢性腎疾患患児のストレスとコーピング方略との関連がストレス反応に及ぼす影響－コーピングの組み合わせの観点から－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 578.
- ・ 猪狩恵美子・高橋 智 (2004) 通常学級における病気による長期欠席児の困難・ニーズと特別な教育的配慮－都内小・中学校の養護教諭調査「病気長欠の事例」より－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 723.
- ・ 伊藤直樹 (2002) 筋ジストロフィーを伴う生徒の余暇活動に関する研究. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 213.

- ・伊藤良子・中橋富美恵（1999）院内学級に通う児童のストレスの実態と心理的ケアについて－全国実態調査の結果から－. 発達障害研究, 21(3), 229-234.
- ・石川慶和・小畑文也・小野裕美（2002）慢性疾患のセルフケア尺度の作成. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 278.
- ・赫多久美子・山本昌邦（2004）院内学級におけるICT活用の現状と課題. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 783.
- ・笠原芳隆（2003）第10章 病弱・身体虚弱児の発達と教育. 新版 障害者の発達と支援－特別支援教育/生涯発達支援への対応とシステム構築－. 菅野 敦・橋本創一・林安紀子・大伴 潔・池田一成・奥住秀之（編）, 山海堂, 213-227.
- ・桑田弘美・村井静子・三牧孝至（2004）I型糖尿病の子どもの学校生活と母親の意識. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 785.
- ・村上由則（1997）慢性疾患児の病状変動と自己管理に関する研究－病弱教育からのアプローチ－, 風間書房
- ・中井 滋・武田鉄郎・山本昌邦・横田雅史（2004）病弱養護学校の通学児童生徒に関する研究. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 726.
- ・中井 滋・武田鉄郎・山本昌邦・横田雅史（2005）特別支援学校への移行期における病弱養護学校の取り組みについて. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 697.
- ・中村深雪（2002）病気とともに生きる姿の変化－先天性心疾患患者への病気体験に関するインタビュー－. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 285.
- ・中内みさ（2001）病弱児の病気体験のとらえ方の発達の变化と心理的援助. 特殊教育学研究, 38(5), 53-60.
- ・鳴海さちみ・武田鉄郎（2000）筋ジストロフィーの生徒のソーシャルサポートに関する研究－自由記述調査より－. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 307.
- ・鳴海さちみ・武田鉄郎・原 仁（1999）筋ジストロフィーの高校生のソーシャルサポートに関する研究. 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, 137.
- ・西牧謙吾・篁 倫子・武田鉄郎・海津亜希子（2004）病弱養護学校における心身症等の児童生徒の実態 I－心身症等の児童生徒数, 通学状況を中心に－. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 724.
- ・小畑文也（1999）健康障害児の病気に関連する概念の発達. 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, 325.
- ・小畑文也（2000）喘息児と健康児の身体内部位の概念－機能の理解を中心とした検討－. 心身障害学研究, 24, 115-122.
- ・小畑文也・三澤義一（1981）進行性筋ジストロフィー児の「対処行動」に関する研究. 日本特殊教育学会第19回発表論文集, 220-221.
- ・及川 康・宮崎 眞（2005）病弱養護学校において授業参加行動に困難を示す生徒に対する支援－カリキュラム介入を通して(1)－. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文種, 618.
- ・岡 茂（1987）病虚弱児のもつ心理的問題への対処行動に関する因子分析的研究. 特殊教育学研究, 24(4), 30-39.
- ・岡 茂（1988）病虚弱児のもつ心理的問題と対処行動に関する研究－対処行動の規定要

- 因を中心として－. 特殊教育学研究, 26(3), 23-30.
- ・進藤玲子・室田澄江・上野 轟 (2002) 病弱教育における教育相談Ⅱ. 日本特殊教育学会第40回大会発表論文集, 211.
  - ・篁 倫子・武田鉄郎・海津亜希子・西牧謙吾 (2004) 病弱養護学校における心身症等の児童生徒の実態Ⅱ－心身症など行動障害や他の疾患に不登校を伴う児童生徒についての調査－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 725.
  - ・高橋淳子・柳本雄次 (1999) 進行性筋ジストロフィー児の生きる意欲と指導. 日本特殊教育学会第37回大会発表論文集, 138.
  - ・高橋早苗・藤田和弘・山本昌邦 (1997) 慢性疾患児の教育アセスメントに関する一試案. 日本特殊教育学会第35回大会発表論文集, 298-299.
  - ・谷川弘治・駒松仁子・仁尾かおり・鈴木智之・松浦和代・松下竹次 (2005) 小児慢性疾患キャリアオーバーの社会的自立に関する研究. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 176.
  - ・谷口明子 (2004a) 入院児の不安の構造と類型－病弱養護学校児童・生徒を対象として－. 特殊教育学研究, 42(4), 283-291.
  - ・谷口明子 (2004b) 病院内学級における教育実践に関するエスノグラフィック・リサーチ：実践の“つなぎ”機能の発見. 発達心理学研究, 15(2), 172-182.
  - ・谷口明子 (2004c) 院内学級における教育実践の検討－ソーシャルサポートの観点から－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 576.
  - ・田辺恵子 (2001) 慢性疾患児のセルフケアに関する研究動向. 特殊教育学研究, 38(4), 29-35.
  - ・武田鉄郎 (2004) 心身症・神経症等を伴う不登校児の心理・行動特性に関する研究－TRF (=Teacher's Report Form) の結果分析を中心に－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 574.
  - ・武田鉄郎 (2006) 病弱・身体虚弱児の心理・行動特性と支援. 特別支援教育の基礎知識, 橋本創一・霜田浩信・林安紀子・池田一成・小林 巖・大伴 潔・菅野 敦 (編著), 明治図書, 166-182.
  - ・武田鉄郎・原 仁 (1997) 慢性疾患で入院している子どものセルフ・エフィカシーに関する研究. 小児の精神と神経, 37, 71-78.
  - ・築山繁樹・星山麻木 (2004) 学齢期におけるDMD児の支援の研究－病院・学校との連携－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 575.
  - ・土屋忠之・武田鉄郎 (2005) 病院内教育における慢性疾患及び小児がんの児童生徒に対する「体験的な学習」に関する研究－自然体験, 動植物の飼育栽培・観察実験を中心に－. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 696.
  - ・土屋忠之・武田鉄郎 (2006) 病院内教育における慢性疾患及び小児がんの児童生徒に対する「体験的な学習」に関する研究－校外活動・社会体験活動を中止に－. 日本特殊教育学会第44回大会発表論文集, 140.
  - ・馬越裕美・長尾秀夫 (2000) 神経・筋疾患 (進行性筋ジストロフィー等) 患者のQOLの意識調査に関する研究. 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集, 306.
  - ・馬越裕美・長尾秀夫 (2001) 神経・筋疾患 (進行性筋ジストロフィー等) 患者のQOL



- の意識調査から支援を考える. 日本特殊教育学会第39回大会発表論文集, CD-ROM.
- 矢吹和美 (1998) 病弱児の心理的援助にかかわる授業－物語教材を用いて－. 日本特殊教育学会第36回大会発表論文集, 298-299.
  - 山口志麻・高野美由紀 (2005) 病弱養護学校における不登校生徒に対する心理教育的支援. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 676.
  - 横田雅史 (1997) 小児医療における教育問題. 小児の精神と神経, 37(1), 41-45.
  - 横田哲弥・小畑文也・石川慶和 (2004) 健康障害児の援助ニーズに関する研究. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 577.
  - 米須由美子・星山麻木 (2004) DMD児をもつ母親の心理変容過程に関する研究－心理変容過程グラフの一事例を通して－. 日本特殊教育学会第42回大会発表論文集, 579.
  - 渡部親司・成田 滋 (2002) コンピューターを活用した進行性筋ジストロフィー症児の自己効力感の形成. 特殊教育学研究, 39(4), 21-31.